

七
仏印問題

1 日仏印經濟協定の成立

712 昭和15年10月5日

仏印との通商交渉のための特派使節派遣に關

する情報部長談話

付記 昭和十五年十月九日、松岡外務大臣閣議説明

資料

「佛領印度支那トノ通商交渉ニ關スル件」

對佛印通商交渉の爲特派使節派遣に關する

外務省情報部長談

昭和十五年十月五日午前十一時

帝國と佛領印度支那間の經濟的協力促進方に關しては曩に東京に於て日佛間に話を爲したる結果相互の經濟關係を密接ならしめ經濟提携の實を擧ぐる爲の具體的方法に付速なる機會に商議すへきことと爲つた

而して河内に於て開始せられたる軍事的問題に關する現地交渉も過般妥結に達したので今般松宮大使を首班とする使

節團は佛印に赴き佛印政廳と直接具體的交渉に當ることとなつた

松宮特派使節に隨行すへき一行は左の通り内定し來る十一日神戸出帆アリゾナ丸にて現地^(省略)に赴く豫定である

(付記)

佛領印度支那トノ通商交渉ニ關スル件

一、本年八月三十日松岡外務大臣ト「アンリイ」佛國大使トノ間ニ交換セラレタル公文ニ於テ佛國政府ハ日本國カ東亞ニ於テ政治上軍事上竝ニ經濟上優越セル地位ヲ占ムルヲ承認シ、印度支那ニ於テ日本ニ對シ如何ナル第三國ヨリモ優越セル能フ限り有利ナル待遇ヲ許與スヘキ旨明約セルカ、右諒解ニ基キ佛印總督ニ對シ具體的通商交渉ヲ行ハシムル爲今回松宮大使ヲ首班トスル使節團ヲ派遣スルコトニ相成リタル次第ハ十月一日閣議ニ於テ報告ノ通りナリ然ル處其後佛國政府ニ於テハ本國ヨリ専門家派遣

必要等ノ都合上交渉ヲ東京ニ於テ行ヒ度キ希望ヲ有スル
コト判明シタルヲ以テ佛印總督ト使節團トノ間ニ先ツ至
急解決ヲ適當且可能トスル問題ヨリ逐次解決ヲ計ラシメ
又解決ニ準備ヲ要スル困難ナル問題ハ佛本國ヨリ専門家
來着ノ上交渉シ協定セシムルコトトスル方針ヲ以テ目下
佛國政府ト交渉中ナリ

二、佛領印度支那ニ對シ要求スヘキ事項ハ別紙甲號及乙號ノ
通ナル處右ハ九月三日閣議ニ於テ承認セラレタル『對佛
印支經濟發展ノ爲ノ施策』中ニ指示セラレタル範圍内ニ
於テ差當リ緊急實現ヲ適當トスル問題ヲ取上ケタルモノ
ニシテ極力之カ貫徹ヲ期シ能フ限り我方ニ有利ニ問題ヲ
解決シ度キ意向ナリ

三、我方要求事項ハ入國、企業、主要物資ノ確保並貿易ノ增
進等各般ノ事項ニ亘リ現在行ハレツツアル不合理ナル障
害ヲ消除シ之ニ依リ日佛印兩國關係ヲ更ニ緊密安定ナラ
シメ以テ大東亞共榮圈ノ實ヲ擧ケシメンコトヲ期スルモ
ノナルカ其概要左ノ通ナリ

(イ)重要物資確保ニ關スル事項

米其他我方ノ必要トスル重要物資ニ付テ優先的ニ對日

供給増加ヲ認メシメ且輸出税其他ノ輸出阻害措置ヲ撤
廢セシムルコトヲ目的トス

(ロ)本邦品輸入促進ニ關スル事項

極力本邦品輸入ヲ促進シテ從來極度ニ我方ニ不利トナ
リ居ル貿易關係ヲ調整セシムル爲禁止の高率關稅ノ減
免(特ニ重要ナル本邦品ニ對シテハ第三國品ヨリモ有
利ナル特惠稅率ヲ設定セシム)ヲ爲サシメ且輸入割當
其他ノ制限的措置ヲ撤廢セシムルコトヲ目的トス

(ハ)決濟ニ關スル事項

日本及佛印間ノ貿易決濟ハ之ヲ全部圓爲替決濟ト爲サ
シムルト共ニ我方ニ相當金額ノ「クレヂット」ヲ設定
セシメ本邦品輸出促進ト相俟テ我必要物資取得ニ付成
ルヘク外貨支拂ノ必要ヲ避ケルコトヲ目的トス

(ニ)入國、居住、旅行等ニ關スル事項

本邦人ノ入國居住旅行等ニ關スル制限ヲ撤廢セシメ本
邦人ノ活動ヲ自由ナラシムルコトヲ目的トス

(ホ)企業經營其他ノ經濟的活動ニ關スル事項

本邦人ノ佛印ニ於ケル企業的活動及各種營業ヲ阻害ス
ル諸般ノ制限ヲ撤廢セシメ本邦人ノ手ニ依ル佛印ノ資

1 日仏印經濟協定の成立

源開發其他經濟的活動ヲ促進スルコトヲ目的トス
(ハ)其他ノ事項

本邦船舶及航空機ニ對シ各種便宜ヲ供與セシメ且佛印
ニ於ケル交通、運輸、通信、電氣等ノ公共事業ノ改良
發達、衛生事業其他ノ福利施設ノ改善方ニ付我方ト協
力シ努力セシムルコトヲ目的トス

別紙甲號

(通商局第六課 昭一五、一〇、三)

對佛印要求事項(通商關係)

一、日本向輸出ニ關スル事項

佛印政府ハ日本ノ必要トスル佛印物資ハ優先的ニ日本ニ
輸出シ且之ヲ輸出促進ノ爲積極的努力ヲ爲スノ原則ヲ承
認シ

(イ)別表二掲グル產品ノ一定量ノ日本向輸出ヲ確保スル爲
必要ナル一切ノ努力ヲ爲スコト

(ロ)前記產品ノ日本向輸出ヲ直接又ハ間接阻害スベキ措置
ハ之ヲ執ラサルコト

(ハ)前記產品ノ日本向輸出ニ關シテハ輸出税、輸出許可税、

其他輸出ニ關聯スル課税ヲ爲ササルコト

(ニ)佛印接壤地域ノ產品ノ佛印經由ニ依ル日本向輸出ニ對
シ特別ノ便宜ヲ供與スルコト

三、日本品ノ輸入ニ關スル事項

佛印政府ハ佛印ノ必需品ハ能フ限り優先的ニ日本ヨリノ
輸入ヲ計リ日本及佛印間ノ貿易關係ヲ調整スル爲努力ヲ
爲スノ原則ヲ承認シ

(イ)日本品ニ對スル佛印關稅ニ付左記内容ノ關稅協定ヲ爲
スコト

(1)別表^(編註)ニ掲グル本邦品ニ對シ別表ニ掲記スル特惠稅率

ヲ設定スルコト竝ニ右稅率ノ引上トナルベキ措置

(關稅品目ノ變更等ニ依ル實質上ノ引上ヲ含ム)ヲ執
ラサルコト

(2)爾餘ノ一切ノ日本產品ニ對シテハ最低稅率(最惠國
待遇)ヲ許與スルコト

(3)一切ノ本邦品ニ對シ爲替補償稅其他關稅以外ノ附加
稅ヲ賦課セサルコト

(ロ)前項ノ關稅引下ニ付妥結スルヲ待タズシテ即時ニ一切
ノ日本品ニ對シ爲替補償稅ノ免除竝ニ最低稅率ノ適用

ヲ爲スコト

尙交渉中現行稅率ノ引上ヲ爲ササルコト

(ハ) 日本品ノ輸入ヲ制限スル如キ禁止又ハ制限措置ヲ執ラ

サルコト(但シ合意ニ依リ輸入割當制ヲ採用スルコト

ヲ妨ゲサルコト) 差當リ綿製品其他ニ對スル現行割當

制ノ制限ハ日本品ニ關スル限り適用セサルコト

(ニ) 本邦品ノ印度支那ヘノ輸入ニ際シ現在要求セラレ居ル

如キ佛國官憲ニ依ル輸入許可證ノ發給ハ之ヲ廢止シ帝

國官憲若ハ其ノ認可ヲ受ケタル機關ノ發給スル原產地

證明書ヲ以テ之ニ代フルコト

(ホ) 稅關手續及關稅賦課ニ關シ從來行ハレタル如キ不合理

ナル取扱振ハ之ヲ速ニ是正スルコト

三、決濟ニ關スル事項

(イ) 日本及佛印間貿易ノ決濟ハ輸出入共圓爲替決濟トスル

コト

(ロ) 佛印物資輸入資金トシテ佛印政府ハ日本政府ニ對シ相

當額(我佛印物資輸入額ノ二分ノ一若ハ三分ノ一程度

トス)ノ「クレヂット」(期限一ケ年)ヲ供與スルコト

(ハ) 日佛印間貿易及貿易外收支ノ決濟ニ關シ貿易及支拂協

定ヲ締結スルコト

別表 一年間ニ日本ニ輸入セラルベキ商品

一、米 七十五萬噸

二、玉蜀黍 二十萬噸

三、生護謨 二萬噸

四、松脂 二千噸

五、漆 一千噸

六、「ヒマシ」 五千噸

七、鐵鑛 十萬噸

八、「マンガン」鑛 五千噸

九、「ウオルフラム」 四百噸

十、錫 二千噸

十一、亞鉛 五千噸

十二、石炭 六十萬噸

十三、珪砂 所要量(八萬噸)

十四、鹽 十萬噸

十五、燐灰石 所要量(六萬噸)

尙「マンガン」鑛、「ウオルフラム」、錫、亞鉛及鹽ハ

多々益^(辨カ)辯スル次第ナルニ付右掲出數量以上ニ生産額若ハ輸出額全部ノ確保ヲ希望ス

別紙乙號

(昭和十五、十、八、歐亞三課)

入國、企業等ニ關スル我方要求及提議事項

一、入國、居住等ニ關スル事項

(イ)入國査證相互免除制度ノ復活

(出入國査證相互免除ニ關スル一九三二年ノ日佛印間

了解ノ勵行)

(ロ)將來ニ於ケル入國ノ自由

(邦人ノ入國ヲ禁止又ハ制限シ乃至之ニ制限的條件ヲ設ケサルコト)

(ハ)入國ノ際ニ於ケル税金、寄託金及之ニ類スル賦課金ノ免除

(特ニ、現在海防、「ツーラン」、西貢ニ於テ下船ノ際徴收セラレ居ル税金ヲ免除スルコト、移民ヨリ本國歸還費トシテ豫メ徴收スル寄託金ノ免除ヲ將來モ繼續スルコト)

(二)居住及旅行等ノ自由

(特ニ居住ノ地域ニ關シ不當干涉ヲ爲ササルコト、身分證明書下付手数料ノ免除乃至減額、國內旅行ニ於ケル査證手續ノ免除、港灣ニ於ケル煩鎖^(讀)ナル各種許可手續ノ免除)

(ホ)身體及財産ノ保護ニ關スル佛國民待遇

(ハ)入國、居住、旅行等ニ關スル其ノ他凡テノ事項ニ付昭和十五年八月三十日附日佛交換公文中ノ原則ニ依リ好

意の取計ヲ爲スヘキコト

二、企業經營其ノ他ノ經濟的活動ニ關スル事項

(甲)一般の事項

(イ)土地、遺物ノ所有ニ關スル佛國民待遇

(ロ)私有地借入及官有地租借ニ關スル佛國民待遇

(ハ)經濟取引ニ對スル妨碍ノ取締

(特ニ反日華僑ノ取締)

(二)一九三四年外國人雇傭制限令ノ適用免除其ノ他勞働ニ關スル佛國民待遇

(ホ)邦人單獨ノ各種營業、企業等又ハ日佛合辦事業ノ創始、經營又ハ擴張(既設佛國法人ノ買收又ハ之ニ對スル參

加、日佛公私合辦會社新設等ヲ含ム）ニ關スル好意の取計

（特ニ各種「コンセツション」及免許ノ許與竝ニ支店、出張所、代理店、工場、作業所等ノ新設、維持ニ關スル好意の取計、政治的理由ニ依リ右各種事業ノ經營ニ支障ヲ生セシムルカ如キ輸出入禁止制限等ノ措置ヲ執ラサルコト）

（ハ）探鑛其ノ他資源調査ニ關スル便宜供與

（ト）邦人ノ經濟的活動ニ關スル其ノ他凡テノ事項ニ付昭和十五年八月三十日附日佛交換公文中ノ原則ニ依リ好意の取計ヲ爲スヘキコト

（乙）特殊の事項

（イ）鑛業權ノ取得及鑛業經營ニ關スル佛國民待遇

（特ニ、各種日佛合辦事業ノミナラス日本人及日本人ニ對シ鑛山探掘權ヲ許與スルコト）

（ロ）森林ノ伐採及伐採物ノ賣買ニ關スル佛國民待遇

（ハ）沿岸漁業及内水漁業ノ許可竝ニ之カ經營（漁業基地ノ設置、炭水ノ補給、漁獲物ノ販賣、運搬、貯藏等）ニ關スル佛國民待遇其ノ他邦人ノ漁業ニ對スル便宜供與

（ニ）營業制限規定（一九三三年ノ外國人入國滞在規則第二十三條）ノ適用免除

（通關代理業、船舶運送業、海上運送代理業、通信業、請願巡查、移民取扱業、周旋業、旅館業、遊戯飲食店、武器彈藥商、「ラヂオ」電氣器具竝ニ同附屬品製造及ハ販賣業、印刷業ニ從事スルコトノ許可）

（ホ）本邦銀行ノ支店設置ニ關スル好意の取計
三、日本船舶及航空機ニ對シ八月三十日附日佛交換公文ノ原則ニ依リ各種便宜ヲ供與スルコト

（特ニ、船舶ニ付沿岸航海ニ關スル制限及内水航行禁止ノ免除、港灣施設、荷役、炭水ノ補給等ノ事項ニ關スル好意の取計及航空機ニ付格納庫及乗員宿舍ノ建設、炭水ノ補給、航空無電連絡、氣象觀測等ノ事項ニ關スル好意の取計）
四、佛印ニ於ケル鐵道其ノ他ノ陸上運輸、航空及水上運輸、通信、電氣等ノ公共事業ノ改良發達ニ對スル協力
（特ニ、雲南鐵道ニ對スル投資、經營及技術上ノ協力）
依リ輸送量ノ増大ヲ圖ルコト）
五、佛印ニ於ケル衛生事業其ノ他福利施設ノ改良發達ニ對スル協力

(特ニ、日本人醫師及藥劑師ノ開業、病院ノ建設等ニ依ル協力)

編 注 別表中の「特惠稅率ヲ要求スヘキ品目」は省略。

713 昭和15年10月24日 松宮(順)仏領印度支那派遣大使より
松岡外務大臣宛(電報)

通商問題に関する仏印總督との會談内容報告

ハノイ 本省 10月24日着 發

總督ハ二十一日西貢ヨリ歸任シタルニ付本使ハ挨拶ノ爲同
夕不取敢往訪シ置キタルカ其ノ際ノ約束ニ基キ二十二日午
後澁澤帶同總督(「クーザン」同席)ヲ往訪シ二時間ニ亘リ
會談セリ

右要旨左ノ通り

一、先ツ總督ハ今次交渉ニハ好意ト理解ヲ以テ當ル旨ヲ述ヘ
我方ニ於テモ同様ノ態度ヲ採ラレ度キ旨希望シタル上具
體的ニハ(一)日本ノ希望スル品目(米、石炭、護謨、「ウオ
ルフラム」等ヲ例示ス)ノ供給ニハ佛印側ハ努力スヘク

(二)佛印ノ希望スル品目(藥品、農具、其他ノ器具ヲ例示
ス)ヲ日本ヨリ買付度ク(三)之カ輸入ヲ容易ナラシムル爲
現行最低稅率ヲ適用スヘシ(四)双方希望ノ品目數量ニ關ス
ル交渉妥結ヲ見タルトキハ三箇月ヲ期限トスル暫定協定
ヲ結ビ(二)三箇月ニ限定セル理由ハ本國政府カ東京會談ヲ
考慮セル爲ニシテ總督自身トシテハ或種品目ニ付テハ期
限ヲ延長スルモ差支ナキ意嚮ナル旨附言セリ(五)支拂問
題ハ銀行間ノ話合ニ讓ルコトト致度シ

二、依テ本使ハ今回ノ會談ニハ互ニ疑心ヲ去リ互ニ信頼シ
友好的成果ヲ齎スヘキ建設的態度ヲ以テ臨ムコトヲ切望
スト冒頭シ佛側カ日本ノ東亞ニ於ケル地位及日佛印間ノ
自然的地理的緊密關係ヲ充分認識スルコトハ今次會談ノ
根本的條件ナリト述ヘ種々説明ノ結果大體諒解セシメタ
ル爲松岡アンリ一問原則協定ニ言及シ今次會議ノ重要部
分ハ之ヲ具體化スルコトニアル旨ヲ指摘シ總督ノ積極的
努力ヲ要望シ置キタリ

三、次テ右具體化實現ノ爲ニハ通商、文化等廣範圍ニ亘リ會
談ノ要アル旨説示シタル處總督ハ自分ハ斯ル廣範圍ニ亘
ル訓令ヲ受ケ居ラサル次第ナリト逃ケタルヲ以テ本使ハ

十一月ノ東京會談ヲ容易ナラシムル爲原則問題ニ付テモ或程度ノ意見交換ヲ爲スコト必要ナリト説キ之ニ同意セシメタリ

四、更ニ本使ヨリ日本、佛印間ノ貿易増進問題ニ關シテハ總督ノ權限内ニ於ケル事項ニ付最大ノ便宜供與方竝通商上、企業上ノ障礙ヲ除去方(例之華僑ノ取締、關稅規則其ノ他各種煩瑣ナル手續等ノ修正)ヲ要望シタルニ對シ總督ハ能フ限り協力スヘキ旨答ヘタリ

五、本使ヨリ最低稅率ノ適用ニ關シ右ハ單ニ日本品ヲ第三國品ト同一ノ地位ニ置クノミニテ之ヨリモ優位ニ置クトノ約束ニアラスト述ヘタル處東京會談ニ於テハ必然特惠稅率ニ付商議アルヘク自分ハ稅率變更ノ權限ヲ有セスト答ヘタルカ種々應答ノ末暫定協定品目ニ關シテハ更ニ稅率ニ付テモ考慮スヘキ旨ヲ仄カセリ

六、本使ハ佛印ノ諸制度ニ關シ右ハ從來頗ル排他的ニテ日本人ノ活動及日本トノ通商ヲ阻害セル所甚シキモノアリ斯ノ如キハ日本ノ東亞ニ於ケル地位及日本佛印間ノ自然的關係ニ照ラシ根本的ニ修正セラルヘキ旨指摘シタル處總督ハ間接ニ本使ノ所論ヲ承認シテ從來佛印ハ本國經濟ノ

爲「リザーブ」サレ居リタル嫌アリタリ此ノ點ニ付テハ東京ニ於テ原則的ニ調整セラルヘシト答ヘタリ

七、佛印資源ノ日佛合辦ニ依ル開發ニ關シ總督ノ意見ヲ徵シタル處本件ニ關スル本國ノ意嚮ヲ知ラスト應ヘタルヲ以テ總督個人ノ意見ハ如何ト突込ミタルニ暫ク躊躇シタル後最近燐灰石開發ノ爲ノ日佛合辦會社成立セルカ右ニ對スル自分ノ好意的態度ハ貴問ニ對スル回答ヲ爲スモノナラント答ヘタリ

八、尙原則的協定ヲ具体化スルニ當リ官僚的、事務的、専門的見地ヨリ種々故障ヲ申立テ折角ノ原則ヲ臺無シニスルカ如キコト屢々之アル處本會談ニ於テハ斯ルコトナキ様致度シト念ヲ押シ總督同意セリ

九、最後ニ東京會談カ若シ十一月末開始セラルルコトト成レハ右開始迄ニ當地ニ於ケル交渉ヲ終了セシムル必要アルニ付貴總督ハ誠意ヲ以テ自己ノ有スル權限ヲ最大限度ニ利用シテ諸問題ヲ迅速ニ處理セラレ度シト要求シタルニ對シ總督ハ之ニ同意シ充分ノ努力ヲ約セリ

編 注 本電報は電報番号不明。

714 昭和十五年十一月二十八日

仏印との通商交渉を東京に移して再開する旨

の外務当局談

付記 昭和十六年六月、仏印交渉事務室作成「日佛

印經濟交渉要録」より抜粋

東京交渉における日本側の希望大綱提議とコ

メ問題の交渉経緯

日本印度支那間通商交渉に關する外務當局談

昭和十五年十一月廿八日午後六時半發表

十月下旬以來佛蘭西領印度支那河内に於て開始された通商交渉は松宮帝國代表とドグー佛印總督との間に數次の會合が行はれ、その間種々の問題に就いて意見の交換が行はれた結果、双方の立場は明瞭になつたけれども佛蘭西側の要請もあり本件交渉を東京に移すことになつたので松宮代表は近く歸朝する運びとなつた。

東京に於ける交渉は十二月下旬頃開始される豫定で佛印側委員はアンリー大使を主席とし佛本國及佛領印度支那より派遣せられる委員を合せ二十餘名となる見込である。

(付記)

東京會談

一、根本問題及佛印米輸入問題

昭和十五年十二月中旬カラ下旬ニカケテ東京會談ノ爲ノ佛側代表部カ到着シタ、代表部ハ元印度支那總督「ルネ・ロバン」(本國ヨリ來朝)カ全權トシテ主宰シ佛印財務監督局長官「クレーザン」カ副團長格テ同經濟局長「マルチ」(兩人ハ何レモ河内交渉ニ當ツタ事前述ノ通り)及本國植民省監察官「リュッフエル」其他十數名ヲ以テ構成サレテ居タカ主トシテ交渉ニ當ツタノハ前掲ノ四名テ他ノ部員ノ大半ハ會談ノ中途テ歸國シタ、「アンリー」大使ハ首席全權ノ資格ヲ有シタカ實際ノ會談ニハ參加シナカツタ又「ロバン」全權(佛語ノミヲ話ス)ニハ通譯兼世話係トシテ田付女史ヲ隨伴サセテ置イタカ之ハ日本側トノ意思疎通ノ爲又聯絡ノ爲甚タ便宜カアツタ、我方ハ松宮大使力會談ヲ主宰シ濫澤書記官カ事務總長格テ永井事務官ト共ニ専門ニ之ニ當ツタ其他水野通商局長以下通商局南洋局及條約局ノ係官カ補助シタ尙我方ハ本會談ノ當事者ニ對シ特別辭令ヲ發給セ

ス單ニソノ名前ヲ佛側ニ通知シタノニ止メタ又關係省トハ隨時聯絡ヲトツタカ會談ハ凡テ外務省カ總括的ニ當ルコトトナリ唯専門的事項ノ討議ニ際シ商工、大藏等ノ係官カ隨時參加シタ

會談ノ方法ハ大體河内會談ノ遣り方ヲ踏襲シタ、即チ松宮大使ハ專ラ「ロバン」全權ト直接交渉スルコトトシ其ノ會談ニハ通譯(主トシテ田付女史)以外誰モ立會ハヌカ又ハ兩代表部ノ極少數ノ人ノミカ立會ツタスル兩全權ノ所謂私的會談ハ會議ノ全般ヲ通シ頻繁ニ行ハレタ、具體的ノ問題ハ主トシテ澁澤永井「ターザン」「マルチ」「リュツフェル」等ノ兩代表部委員連ノ會合テ談合シタソシテ斯ル委員會テ纏マラヌ問題乃至ハ根本的ノ問題ヲ兩全權ノ話合ニ移シソコト決裁シタ、兩全權以下委員連カ顔ヲ連ネタ所謂全體會議モ最初ハ數回行ハレタカソノ際ハ兎角議論カ表向キノモノニナリ過キ兩者共各々自分ノ主張ヲ繰返スノミテ得ル處カ少ナカツタカラ會談ノ後半テハ殆ト此ノ種ノ會合ヲ行ハナカツタ尙會合ハ主トシテ次官官邸テ行ハレタ

東京會談ニ對スル我方ノ方針ハ河内會談ニ對スル訓令ト同一精神ノモノテアツタカ河内ニ於ケル交渉ヲ參酌シテ多

少之ヲ修正シ且一層具體的ノモノニシタ佛側ハ自分カラ先ニ案ヲ提出スルコトヲセス先ツ日本側ノ案ヲ見タ上テ對案ヲ出ス或ハ故障ヲ申出シテ日本案ヲ拒絕スルト云フ様ナ方針ヲトツタ

兩代表部ノ第一日ノ顔合セハ十二月三十日ニ行ハレタ、コノ會談ト三十一日ノ私的會談及越ヘテ昭和十六年一月四日ノ第二次會談テハ重ニ一般的ナ問題ニ付テ話シタ、松宮大使ハ「今後ノ交渉ノ基礎トナル點」ト前提シテ河内會談ニ於テ佛側ハ日本ノ現實ノ地位、日佛關係トイフ點ニ付充分理解セズ誠意カナカツタカラ會談ハ不成立ニ終ツタ此ノ轍ヲ踏マヌ様ニシテ貫ヒ度シ(「ロバン」ハ河内交渉ノ事ハ不知、河内ニテ如何アラウトモ本交渉ハ其ト別物ナリト答フ)又佛及佛印ハ過去ニ於テ往々反日對態度ニ出タシ現ニ日本ト佛印トノ關係ハ自然ニ戾リ阻隔サレテ居ル此ノ事態ヲ改メネバ本當ノ平和ハ確立出來ナイ且日本ハ生長シツツアリ過去ト同シ着物ヲ着セテ押込メテ置カウトシテモ無理テアル斯様ナ根本的ノ點ニ付テヨク認識スルコトカ會談ヲ成立サス爲ニ必要テアルト説キ次ニ日本ノ根本的ナ希望大綱ヲ一括提出シタ、我方カ會談ノ當初ニ斯ル希望項目ヲ一

1 日仏印經濟協定の成立

轄提示シタノハ日本ノ本會談ニ期待スル處ノモノヲハツキリト先方ニ了解サセル爲デ且中途カラ新要求ヲ出シテ先方ニ不安ノ念ヲ惹起スルコトヲ避ケンカ爲テアツタ右希望大綱ハ左ノ通りテアル

一、日本經濟ニトリ必要トスル佛印產重要物資ハ優先的ニ日本ニ輸出セシム

特ニ米、及生護謨ハソノ輸出餘力ヲ全部日本ノ爲留保ス且ソノ輸出價格ハ合理的水準ニ置ク様速ニ必要ナル措置ヲトルヘシ

二、佛印トシテ輸入スヘキ物資ハ優先的ニ日本ヨリ之カ輸入ヲ計リ又日本ハ佛印ノ必要物資ヲ出來得ル限り供給スルコトニ努メ以テ兩國間貿易均衡ヲ達成スル爲ニ努力ス之カ爲重要日本品ニ對シ關稅ヲ免除スヘシ

三、兩國間ノ通商取引ハ原則トシテ圓貨決済トシ之カ爲必要ナル支拂協定ヲ締結ス

四、佛印ニ於ケル入國、居住、航海、産業、企業其他經濟的文化的活動ニ付日本人ニ對シ原則トシテ佛本國人待遇ヲ供與ス

五、佛印ノ資源開發ノ爲日佛間協力ノ原則ヲ承認シ之カ實行

ノ具体的方策ヲ協議決定ス

六、以上ノ如キ日本及佛印間ノ經濟緊密化ヲ實現スル爲兩國間ニ一種ノ經濟同盟ヲ締結ス

「ロバン」ハ原則的ナ意見ニ付テハ主トシテ聽キ役ニ廻リ大体同感ノ意ヲ示シタソシテ根本的希望大綱ニ對シテハ一層具体的ナ要求案ヲ出シテ貰ツテソノ際討議シ度イト述ヘ明確ナ回答ヲシナカツタ只自分ハ全力ヲ盡シテ本交渉ヲ妥結ニ導ク心算テアルト繰返シ言明シタ

當時本邦ハ動モスレハ市場ニ米カ不足シ政府ハ米ノ配給制度ヲ準備中テアツタ之カ爲佛印米ノ輸入ヲ早急ニ確保スル必要カアルノテ本會談テハ具体的問題トシテハ最初ニ米ノ問題ヲ討議スルコトニ兩全權間テ話合ツタ尙松岡大臣ヨリモ「アンリ」大使及「ロバン」全權ニ對シ米ノ問題ニ付テ骨ヲ折ツテ貰ヒ度イト非公式ニ申入レタ佛印米ノ輸入數量ニ付テハ我方ハ百萬噸ヲ希望シタカ先方ハ十六年度ノ佛印米輸出全量ヲ百五十萬噸ト見テ七十萬噸ヲ日本ニ、二十萬噸ヲ佛本國ニ留保スルト述ベタ、七十萬噸ハ最低ノ保證量トシテ我方ハ承諾シタ、ソシテ佛本國向二十萬噸ノ内實際

本國ニ運送サレヌ部分ヲ日本ニ留保スルコトヲ要請シ先方ハ之ヲ容レタ、此ノ點ハ比較的樂ニ片附イタカ第三國行ノモノカ問題トナツタ、先方ハ對日保證量カ滿タサル限リ自由ニ第三國ニ販賣スルコトヲ主張シタカ我方ハ斯テハ實際上保證量ノ輸入カ確保出來ナクナル處カアルシ又重慶側ヤ反樞軸國側ニ自由ニ出サレル事ハ容認出來ナイト反對シタ、結局佛印米ノ輸出可能量カ九十萬屯ヲ超エタ場合ニハソノ超過分ノ内十二萬屯迄ハ上海佛租界ニ出シ得ルカ他ハ矢張り日本ニ留保スルト云フ事テ落着シタ、尙本邦ハ此等ノ白米ヲ買付ケルコト、之ハ日本國內及滿洲國支那ノ邦人及軍隊ノ供給ニ充テ第三國ニ輸出シナイ事ヲ約束シタ

價格ノ點ニ付テハ先方ハ一ト月毎ニ決定スル事ヲ主張シタカ我方ハ平均相場ヲ決メネハ買付ニ從ヒ無暗ニ騰貴シテ困ル政府カ多少統制スレハ一定値段乃至平均値段テ引渡シ得ル筈デアル又佛印ノ實情カラ見レハ屯當リ百圓見當テ農民ハ満足出來ル筈タト強ク主張シタ先方ハ價格ノ決定ニハ頗ル難色カアツタカ「ロバン」全權カ部下ヲ督勵シタ結果裸値段屯當リ一號米百二十二「ピアストル」ニ號米百十七「ピアストル」ノ一定價格テ引渡スコトニ決定シタ

支拂ニ付我方ハ大量ヲ購入スルコトデアルシ農産物ノ大量購入ニハ「クレヂット」ハ例ノ多イ處デアルソレニ佛印トシテモ主要產品ノ輸出力確保サレル譯テ經濟上ノ安定ヲ齎ス次第デアルトノ理由ノ下ニ一年間ノ支拂代金据置キヲ主張シタカ先方ハ佛印ハ經濟力カ弱イカラトテモ左様ナ取扱ハ出來ヌト強硬ニ反對シタ併シ結局我方ノ提案ヲ承諾シ本年度ノ米代金ハ一年間正金銀行ニ据置ク事トナツタ。

麻袋ニ付テハ從來佛印ハ印度カラ之ヲ輸入シテ居タカ英側ハ佛印米ノ對日輸出ヲ妨礙スル爲佛印ニ對スル麻袋ノ供給ヲ禁止シタ之カ爲日佛印双方テ麻袋カ缺乏シタカ之ハ日本側カラ出來ルタケ供給シ一個ノ麻袋ヲ何遍モノ運送ニ使用スル等ノ方法テ遣リ繰ル事トシ日佛印混合ノ麻袋委員會ヲ作り隨時適策ヲ講スル事等ノコトニ決定シタ

斯様ニシテ一月二十日米ニ關スル議事録カ松宮「ロバン」ノ兩全權ニ依リ「イニシアル」サレタ、佛側ハ本決定モ他ノ決定ト共ニ一括シテ會談ノ結果出來ルヘキ協定中ニ繰入レル事ヲ主張シ從而之タケヲ單獨協定トスル事ニハ反對テアツタカ我方ノ事情ヲ參酌シ不取敢決定事項ヲ暫定的ニ實行スル事ヲ承諾シタ、斯テ二月後半カラ佛印米カ日本

二積出サレル事トナツタ
(以下省略)

715 昭和16年2月19日
在仏国原田(健)臨時代理大使より
松岡外務大臣宛(電報)

東京での日仏印經濟交渉を早急に妥結するよ
う仏国政府当局説得について

ヴィシー 2月19日後發
本省 2月20日前着

第八三號(至急)

貴電第五九號ノ二、三ニ關シ(佛印産「ゴム」及協定期間
ニ關スル件)

一、十九日「アルナル」公使ヲ往訪東京ニ於ケル日佛經濟
交渉ノ爲既ニ一般的訓令發セラレタリヤト質シタルニ既
ニ發出セラレタルモノモ有ルモ他ニ廣汎ナル訓令ヲ發ス
ル手筈トナレリト答ヘタルヲ以テ本官ヨリ東京ニ於テハ
一日モ早ク交渉ノ成立ヲ期待シ居ルニモ拘ラス今日迄討
議カ遅延シ來リタルコトハ大イニ不滿ニ思ヒ居ル次第ナ
リトシ豫テ貴官ノ説述ノ通り政府當局ニ於テハ誠意ヲ以
テ交渉ノ妥結ヲ期待シ居ラルトシテモ佛出先カ誤レル

忠義立ヨリ却テ交渉ノ進展ヲ遅ラスカ如キコトナキ様此
ノ上トモ政府ノ方針ヲ徹底セシムル様セラレタシト申聞
ケ置キタリ

二、米其ノ他通商事項ニ關スル協定期間ヲ一ケ年ニ限定ス
ルカ如キ訓令ヲ發出セラレタル趣ナルカ如何ナル理由ニ
基クモノナリヤト質シタルニ米ニ關シテハ毎年ノ産額不
明ナルカ爲ナリト答ヘタルヲ以テ本官ヨリ日本米ノ産
出國ナレハ斯ル事情ハ充分了解シ居ルモ過去ノ實績ニ照
シ大體ノコトハ豫メ推定セラルヘク且其ノ他ノ事項ニ關
シテハ今次ノ交渉ハ日本ト佛印トノ間ニ恆久的經濟提携
ヲ爲スヲ目的トスル旨重ネテ説述シタルニ同公使ハ目下
一般情勢不安定ナル此ノ際右ハ極メテ困難ナリト思考セ
ラルルモ例ヘハ協定期間ヲ一ケ年宛更新シ得ル様ニ取
極置ク等ノ方法モ考慮シ得ヘク早速關係當局トモ協議ヲ
約シタリ

三、尙同公使ハ日佛合辦會社案ニ對シテハ佛國トシテハ代案
トシ日佛經濟協力ノ具體化ヲ促進スル意味ニテ經濟協力
審議會ノ設立案ヲ提示方訓令セリト述ヘタリ

716 昭和16年5月6日

日仏印經濟交渉妥結に関する情報局発表

付記一 「日佛印經濟協定要旨」

二 昭和十六年六月、仏印交渉事務室作成「日佛

印經濟交渉要録」より抜粋

東京交渉におけるゴム・錫の交渉経緯

日佛印經濟交渉妥結に関する情報局発表

昭和十六年五月六日午後四時

日佛印間の經濟關係を新たな基礎の上に樹立することを目的として、客年十二月以來東京に於て開催せられた日佛印經濟會商は友好裡に相互理解の精神を以て連日會談を重ね來つた、本會商はその交渉事項が廣範且多岐に亘つて居つたか松宮大使とルネ・ロバン總督とを夫々首班とする兩國代表部は熱心なる討議の結果今般各種問題に付いて完全に意見一致し本日日本側よりは松岡大臣及松宮大使、佛國側よりはアンリー大使及ロバン總督に依り居住航海條約及關稅、貿易、支拂協定の調印を見るに至つたのである、右條約協定(要旨は別紙の通)は今後日佛印間の經濟關係を密

接ならしむる上に多大に寄與するものであり、斯くして東亞に於ける日佛兩國の協力の新たな段階が開かれるに至つたことは同慶の至りである。

(別紙)

條約及協定要旨

居住航海條約は相互の國民及船舶の待遇に付て規定したもので日佛印相互間に於て入國、居住、動産不動産の所有及使用、商工業の經營、各種課稅の賦課、日佛印双方の會社の待遇等に關して主として内國民待遇然らざるものは最惠國待遇を許與すること、船舶に對しても原則として自國船待遇を與ふる事を規定して居る。

關稅、貿易及其の決済の様式に關する協定は全文三十餘ヶ條及附屬文書よりなる浩瀚なる協定であつて左記趣旨を定めたものである。關稅に關しては相互に最惠國待遇を約する外佛印は主要日本品に對し關稅免除又は現行最低稅率の輕減を認め其の他に付ては凡て最低稅率を課することとし日本も亦主要佛印產品に對し關稅上の特典を與へた其他通過稅の免除等に付ての規定を含んで居る。

1 日仏印經濟協定の成立

貿易に關しては相互間の貿易を躍進せしむる主旨の下に米、玉蜀黍、石炭、各種礦物其の他主要佛印產品の對日輸出並びに織維工業品、雜貨其の他の製造品等各種日本品の對佛印輸出に付定めた。

貿易の決済に付ては原則として求償制度に基き相互の支拂を直接橫濱正金銀行及印度支那銀行を通し圓貨及ピアストルに依り決済することとし一々の取引に付外貨爲替を要せざる事とした又佛印側は日本の買付くる佛印米の支拂に關し特典を認めた。

以上の外佛印輸出入組合に對する日本商社加入問題、佛印に於ける農、鑛、水力利權に對する日本資本の參加、佛印に於ける日本人學校の開設、日佛印間一般經濟問題を審議する爲の定期經濟會議の開催等に付ても合意が成立した。

(付記一)

日佛印經濟協定要旨

一、居住、航海ニ關スル條約

(一) 本條約

相互ニ入國ノ自由ヲ認メ居住其他ニ關シ原則トシテ内

國民待遇ヲ許與シ其ノ他ノ事項ニ關シ最惠國待遇ヲ許與ス

船舶ニ關シテモ相互ニ原則トシテ自國船舶ト同様ノ待遇ヲ與フル事ヲ規定ス有效期間ハ五ケ年トス

(二) 議定書(不公表)

日本カ佛印ニ於テ一方面的ニ取得セル特權ニ付左ノ如キ取極ヲ爲スコトトセリ

佛印在留日本人ニ對スル身分證明書手數料ハ輕減セラレバク、外國人ニ對スル職業制限又ハ禁止令ハ多クノ場合日本人ニ適用セラレザルベク、又本邦人ノ商社ニ於テハ外國人雇傭制限令ハ大イニ緩和セララルベシ

日本人ハ學校ヲ經營スルヲ得バク又本邦人及本邦ノ資本カ佛印ノ資源(鑛山農業等)開發ニ參加シ得ル様佛印現行關係法規ノ許スモノヨリモ一層有利ナル條件ノ下ニ日佛合辦會社ヲ設立シ得ル事ヲ規定セリ

又日佛印間一般經濟關係ニ付自由ニ討議スル爲定期混同委員會ヲ開催スルコトトセリ

三、關稅、貿易及支拂ニ關スル事項

(一) 有效期限ハ一九四三年十二月末日迄トシ何レカ一方が

六ヶ月ノ予告ヲ以テ廢棄セザル限り一年宛延長サル
(二)關稅

兩國ハ相互ニ最惠國待遇ノ許與ヲ約シ佛印ハ日本品ニ對シ原則トシテ最低稅率ヲ適用シ四十數品目ニ對シテハ免稅百三十數品目ニ對シテハ最低稅率ヨリ低キ稅率ヲ課スル事トシ其ノ他四百數十品目ニ對シテハ最低稅率ノ據置ヲ約セリ

之ニ對シ日本ハ佛印產品ニ對シ引續キ免稅ヲ約セルモノ十四種目國定稅率ヲ引下ゲタルモノ二品目ナリ

(三)貿易

佛印ハ日本ノ必要トスル產品ヲ成可ク多量ニ日本ニ供給シ且日本產品ノ買付ヲ増進セントノ主旨ニ基キ相互間ニソノ輸出入割當量ヲ決定セリ

一九四一年度ノ割當量ハ左ノ通り決定セリ

佛印產品ノ對日輸出量

「ゴム」、不取敢一萬五千「トン」(尙右以上ノ數量ニ付テハ今後ノ外交交渉ニ依リ決定スル事トセリ)

玉蜀黍(二〇萬トン)胡椒(二、〇〇〇トン)鹽(四萬トン)牛皮(四〇〇トン)水牛皮(一、四〇〇トン)「ヒマ

シ」油(一、〇〇〇トン)桐油(八〇〇トン)松脂(四〇〇トン)漆(一、五〇〇トン)珪砂(八萬トン)石炭(八〇萬トン)「タングステン」(三〇〇トン)亞鉛(五、〇〇〇トン)錫鑛(二、八〇〇トン)

其ノ他燐灰石、鐵鑛、「マンガン」鑛、「アンチモン」鑛、「クロム」鑛ハ無制限又ハ全產出量

日本產品ノ佛印輸出量

綿布 六、〇〇〇トン(及佛本國ニ對スル割當量二、〇〇〇トンノ内使用セザル部分ヲ日本ニ與フ)

其ノ他 食糧品、化學製品、金屬機械、雜貨等各種品目ニ亘リ本邦品ニ對シ割當品及輸入許可量ヲ決定セリ

(四)支拂

「ゴム」ハ米弗拂トスルモ他ハ圓及「ピアストル」ニ依リ支拂フコトトシ橫濱正金銀行及印度支那銀行ノ二個ノ特別勘定ヲ通シ相互ニ直接決済スルコトトシ特別勘定ハ各月毎ニ清算スヘク清算殘高カ五〇〇萬圓ヲ超エサル限り外貨ニヨリ振替ヲ行ハス

(五)白米ニ關スル取極

一九四一年度ニ於テ佛印ハ日本向最少七〇萬トンノ供

給ヲ約セルカ支拂ハ一年間延拂、價格ハ一年ヲ通シ一
二二比弗(二等米)一一七比弗(二等米)ト決定シ引渡ハ
毎月約一〇萬トン西貢ニ於テ行フコトトス

一九四二年、四三年度ニ於テハ一九四一年度ト類似ノ
引渡條件ニ據ルコトトセルモ、兩年度ニ於テハ其ノ代
金ノウチ夫々三〇%、四五%ヲ「バター」協定ノ勘
定ニ振込ムコトトセリ

三、印度支那ニ於ケル輸出入組合

印度支那ニ於ケル輸出入統制ノ結果新規ノ邦人商社ハ輸
出入組合ニ加入シ得サルコトナリ居ル處左ノ條件ノ下
ニ新規邦人商社ノ加入ヲ容認スルコトトナリタリ

(イ)輸出組合

玉蜀黍ニ付一又ハ二ノ新規邦商ノ加入ヲ認め之ニ對日
輸出額ノ四分之一程度ヲ取扱ハシム

(ロ)輸入組合

新規邦商一〇社迄ヲ組合ニ加入セシメ佛印向日本商品
ノ三分之一迄ヲ之ニ取扱ハシム

編 注 本件諸協定は、昭和十六年七月五日に批准書交換。

(付記二)

護謨ト錫ノ問題

護謨ノ問題ハ復雜^{復雜}怪奇ヲ極メタ

我方ハ米ニ亞イテ本物資ヲ重要視シ最初六萬屯(又ハ輸出
餘力全部)ノ日本向留保ヲ要望シタニ對シ先方ハ最大限二
萬屯迄シカ留保出來ヌト返答シタ、之ハ河内交渉ノ數量ヨ
リモズツト少イノテ我方ハ之ヲ詰ツタ、先方ハ本國政府ハ
日獨向二萬屯本國向二萬屯第三國向二萬屯ト決定シテアル
ト答ヘタカ我方ハ左様ナ決定ハ承認出來ヌト突撥ネタ

スルト其後先方代表ハ日獨へ二萬五千屯、佛本國へ一萬八
千屯、第三國へ二萬五千屯配分スルコトニ獨佛間ニ「ヴィ
ースバーデン」テ協定カ出來(一月末)佛ハ之ヲ變更シ得ナ
イト言ツテ來タ、松宮大使ハ「ヴィースバーデン」ノ決定
ハ日本ニ何等相談無シニ爲サレタモノテ且日獨向二萬五千
屯ハ全部獨逸ニ向ケルコトニナツテ居ル(獨逸政府カラ我
方ニ對シ既ニ其ノ獨逸向積出ニ關スル要請カアツテ外務大
臣ハ之ニ承諾ヲ與ヘテアツタ)我方ハ獨向ノ分ハ日獨間ノ
話合テ決定スルカラ佛印トシテハ全輸出货量ヲ日本ニ留保ス

ヘシトノ要求ヲ留保スル併シ不取敢ノ問題トシテ第三國分トシテ留保シタニ萬五千屯ハ是非日本ニ向クル様ニシテ貴ヒ度イト嚴談シ且話合ノツカ迄ハ新ニ第三國ト契約シナイ様ニト申入レタ、三月ニ入り先方ハ七千屯(乃至一萬屯)ヲ米弗拂テ日本ニ讓ルト言フテ來タ、當方ハ米弗拂ナラハ二萬五千屯全量寄越スヘキテアルト主張シ且又獨逸政府ニ對シ「ヴィシー」ニ日本ノ要求受諾ヲ勸懲スルコトヲ求メタ、獨逸ハ之ヲ承知シタカ「ヴィシー」ニ對シドノ程度迄申入レタカ判明シナイ、何レニシテモ護謨ノ問題ニ付テ佛側ノ言フ處ト獨側カラノ情報ト往々齟齬シテ之ニハ當代表部モ困ツタシ「ロバン」ノ方モ困ツタ双方ノ情報カ食ヒ違ヒ話カトンチンカンニナルノテアツタ

斯様ニ埒カ明カヌノテ我方ハ最低要求量二萬五千屯ノ内不取敢前述一萬屯ハ即時寄越スコト、現在米國向ニ約束濟ノモノ(先方ハ其ノ數量ヲ八千屯ト述ヘタ)ヲ別トシ他ハ佛以外ニハ出サヌコト、佛本國向一萬八千屯ノ内現實ニ積出サレヌモノハ日本ニ賣ルコト等ヲ要求シ支拂ニ付テハ最初ノ一萬屯ニ付テハ米貨拂ヲ承諾シタ然ルニ第三國向(米國向)輸出禁止ノ點ハ依然承知シテ來ナカツタ、當時米國ハ佛印

ノ在米資金ヲ縛リ日本等カラ受取ツタ米貨爲替ノ利用ヲ制限スル氣配カアツタ事及米國ノ對佛本國食糧供給ノ問題カアツテ本國カ米國ノ牽制ヲ受ケテ居タコト等カ影響シテ居ルト思ハレル

數量ニ付テハ先方ハ本國ニ請訓シタ結果最後ニ於テ一萬五千屯ヲ申出シテ來タ本國向ノ内未積出量ヲ日本ニ留保スル件ニ付テハ先方ハ好意的ニ考ヘルト云フテ居タカ之ニハ獨カ横槍ヲ入レタトノ情報モアツタ

斯様ニ最后迄ゴタツイテ話カ纏マラヌノテ「ロバン」全權ハ松宮大使ニ對シ此處テ最后ノ決着ヲツケル事ハ不可能タカラ自分カ歸國ノ上ヨク日本ノ要求ヲ傳達シ政府ノ意嚮モ知り其ノ上テ加藤大使トモ話合ツテ決定スルコトニシヨウ、ドウカ自分ヲ信用シテ貰ヒ度イト云ヒ出シタ、我方モ護謨ノ在庫品カ不足シ一刻モ早ク入手スル必要ニ迫ラレテ居タシ交渉モ殆ト終末ニ近イテ居タノテ之ヲ容レ結局佛印ハ本年度不取敢一萬五千屯ノ日本向供給ヲ約シ日本ハ之ヲ米貨テ支拂ヒ其以上ノ數量ノ日本向供給ニ付テハ今後ノ外交交渉テ決定スルトノ事ニ話カツイタ

錫ニ付テハ全產出量ヲ要求シテ置イタニ對シ先方ハ一割ヲ

佛國用ニ留保シ(之ハ我方承諾シタ)且「ラオス」生産ノ半分ヲ新嘉坡ニ向ケルト云ヒ我方ハ後段ノ點ニ反對シテ居タ先方ハ一應之ヲ内諾シタニ不拘最后ニ之ヲ變ヘテ來タカ結局原案通りテ解決シタ

(以下省略)

717 昭和16年5月6日 調印

仏印に関する日仏居住航海条約

付記 付属議定書

佛領印度支那ニ關スル日佛居住航海條約

大日本帝國天皇陛下及「フランス」國主席ハ

日本國印度支那間ニ於ケル善隣關係ヲ強化シ且經濟關係ヲ増進センコトヲ均シク希望シ

日本國印度支那間ノ居住航海ノ關係ニ適用セラルベキ條規ヲ明確ニ定ムルハ此ノ最モ望マシキ結果ノ實現ニ資スベキヲ信ジ

之ガ爲居住航海條約ヲ締結スルコトニ決シ左ノ如ク各其ノ全權委員ヲ任命セリ

大日本帝國天皇陛下

外務大臣松岡洋右

特命全權大使松宮順

「フランス」國主席

日本國駐劄「フランス」國特命全權大使「アルセー

ヌ・アンリー」

殖民地名譽總督「ルネ、ロバン」

右各全權委員ハ互ニ其ノ全權委任狀ヲ示シ之ガ良好妥當ナルヲ認メタル後左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條

兩國ノ各ノ國民ハ他方ノ領域ノ各地ニ到リ又ハ滞在スルトニ付家族ト共ニ完全ナル自由ヲ有スベク當該國ノ法令ニ從フニ於テハ左ノ權利ヲ享有スベシ

一 旅行及住居ニ關スル事項ニ付總テ内國民ト同様ニ待遇セラルベク

二 自ラ行フト代理人ニ依リテ行フトヲ問ハズ又單獨ニテ行フト外國人又ハ内國民ト共同シテ行フトヲ問ハズ商業及製造業ヲ營ミ竝ニ適法ナル商業ノ目的物タル一切ノ商品ヲ取引スルノ權利ヲ内國民ト同様ニ享有スベク

三 産業、生業又ハ職業ニ從フトコト及修學又ハ學術上ノ研

究ヲ行フコトニ關スル事項ニ付總テ最惠國ノ國民ト同様ニ待遇セラレベク

四 必要ナル家屋、製造所、倉庫、店舗及場所ヲ所有シ又ハ賃借シテ之ヲ使用シ又住居スル爲又ハ商業、産業、農業其ノ他適法ナル目的ヲ以テ使用スル爲土地ヲ賃借スルコトヲ得ベク

五 當該國ノ法令ガ最惠國ノ國民ニ對シ取得シ又ハ占有スルコトヲ許與シ又ハ許與スルコトアルベキ一切ノ種類ノ動産又ハ不動産ヲ相互條件ニ依リ自由ニ取得シ及占有スルコトヲ得ベク

内國民ニ對シテ制定セラレ又ハ制定セラルルコトアルベキ所ト同一ノ條件ニ依リ賣買、交換、贈與、婚姻、遺言其ノ他一切ノ方法ニ依リ右動産又ハ不動産ヲ處分スルコトヲ得ベク又其ノ財産ノ賣得金及總テ其ノ所屬品ヲ自由ニ輸出スルコトヲ得ベク外國人タルノ故ヲ以テ之ガ爲同一ノ場合ニ内國民ノ負擔スル所ト異ナルカ又ハ之ヨリ高キ税金ヲ課セラルルコトナカルベク

六 身體及財産ニ對シテ常ニ完全ナル保護及保障ヲ享有スベク其ノ權利ノ主張及擁護ノ爲自由且容易ニ裁判所ニ申

出ヅルコトヲ得ベク内國民ト同様ニ右裁判所ニ於テ自己ヲ代理セシメンガ爲辯護士、代言人其ノ他ノ法律事務取扱人ヲ選擇使用スルノ自由ヲ享有シ且一般ニ司法ニ關スル一切ノ事項ニ付内國民ト同一ノ權利及特權ヲ享有スベク

七 陸軍、海軍、空軍、護國軍又ハ民兵ノ何レタルヲ問ハズ一切ノ強制兵役ヲ免レ且服役ノ代リトシテ課セラルル一切ノ貢納ヲ免ルベシ又平時タルト戰時タルトヲ問ハズ強募公債及軍事上ノ徵發又ハ取立金ニ付テハ不動産ノ所有者、賃借者又ハ使用者トシテ内國民ト均シク課セラルルモノヲ除クノ外一切之ヲ免除セラルルコト前記ノ事項ニ關シ兩國ノ各ノ國民ハ他方ノ領域内ニ於テ最惠國ノ國民ニ對シ與ヘラレ又ハ與ヘラルルコトアルベキ所ニ比シ不利利益ナル待遇ヲ與ヘラルルコトナカルベク

八 内國民ニ課セラレ又ハ課セラルルコトアルベキ所ト異ナルカ又ハ之ヨリ高キ課金、租稅、手數料又ハ貢納ヲ其ノ性質ノ如何ニ拘ラズ徵收セラルルコトナカルベシ右規定ハ必要アル場合警察手續ノ履行ニ關スル手數料又ハ所謂滞在稅ノ徵收ヲ妨グルモノニ非ズ但シ兩國ノ國民ハ其

1 日印經濟協定の成立

ノ率ニ關シ最惠國待遇ヲ享有スベキモノトス
九 信教ニ關シ完全ナル自由ヲ有スベク禮拜堂ヲ建設シ所
有シ其ノ宗教ノ公私ノ禮拜ヲ行ヒ其ノ宗教上ノ慣習ニ從
ヒ墓地ヲ構築シ所有シ維持シ竝ニ教育施設及宗教的、博

愛的及慈善的事業ヲ設立スルコトヲ得ベク

十 兩國ノ各ノ國民ガ他方ノ領域内ニ於テ有スル家宅、倉
庫、製造所及店舗竝ニ之ニ附屬スル一切ノ場所ニシテ適
法ノ目的ニ使用セラルルモノハ之ヲ侵スベカラズ内國民
ニ對シ法令ヲ以テ定ムル條件及方式ニ依ルノ外之ガ臨檢
搜索ヲ爲シ又ハ帳簿、書類若ハ計算書ノ檢査點閱ヲ爲ス
コトヲ得ズ

第二條

商業、産業又ハ金融業ニ關スル日本國ノ株式會社又ハ其ノ
他ノ會社及組合ハ其ノ構成又ハ目的ガ印度支那ノ領域内ノ
公ノ秩序ニ反セザル限り印度支那ニ依リ正規ニ存在スルモ
ノト認メラル「フランス」國ノ法令ニ從ヒ適法ニ設立セラ
レタル商業、産業又ハ金融業ニ關スル株式會社又ハ其ノ他
ノ會社及組合ニシテ印度支那ニ住所ヲ有シ且同國ニ於テ業
務ヲ營ムモノハ其ノ構成又ハ目的ガ日本國ノ領域内ノ公ノ

秩序ニ反セザル限り日本國ニ依リ正規ニ存在スルモノト認
メラル
右會社及組合ハ他方ノ國ノ領域内ニ於テ其ノ法令ニ遵由シ
其ノ業務ヲ行フニ付最惠國待遇ヲ享有スベシ

右會社及組合竝ニ其ノ支店及代理店ハ他方ノ國ノ領域内ニ
於テ名稱ノ如何ヲ問ハズ最惠國ノ會社及組合ニ依リ負擔セ
ラルル所ト異ナルカ又ハ之ヨリ高キ税金、手數料、租稅及
貢納ヲ課セラルルコトナカルベシ資本、收益又ハ利益ニ基
キ計算セラルル租稅ニ關シテハ右會社及組合、其ノ支店又
ハ代理店ハ租稅ノ性質ニ從ヒ該國ニ投資セル資本ノ部分、
該國ニ所有スル財産、該國ニ流通スル證券、該國ニ於テ獲
得スル利益又ハ該國ニ於テ爲ス業務ニ應ジテノミ該國ニ於
テ課稅セラルベシ

第三條

兩國ノ一方ノ國民ガ他方ノ領域内ニ於テ死亡シタル場合ニ
於テ死亡者ガ判明セル相續人又ハ遺言執行者ヲ死亡シタル
國ニ殘サザルトキハ權限アル地方官憲ハ右死亡ノ發生シタ
ル地ヲ管轄スル死亡者所屬國ノ領事官ニ直ニ右死亡ヲ通知
スルコトヲ要ス

權限アル地方官憲ハ領事官ノ要求アルトキハ死亡證明書ノ正規ノ形式ノ謄本ヲ無料ニテ交付シ以テ右通知ヲ補完スベシ

相續權者若ハ其ノ或者ノ不在若ハ無能力又ハ遺言執行者ノ不在ノ場合ニ於テハ領事官ハ權限アル官憲ヨリ相續權者ノ權利ノ承認及保存ニ必要ナル措置ヲ求ムルコトヲ得ベシ
兩國ノ一方ノ國民ニシテ他方ノ領域内ニ財産ヲ所有スル者ガ右領域外ニ於テ死亡シタル場合ニモ亦前記ノ規定ヲ準用ス

第四條

兩國ノ一方ノ國民タル商工業者ハ他方ノ領域内ニ於テ自ラ行フト又ハ旅商ニ依リテ行フトヲ問ハズ見本及雛形ヲ携帶シ又ハ携帶セズシテ買入ヲ爲シ又ハ注文ヲ取集ムルコトヲ得ベシ右商工業者及其ノ旅商ハ斯ク買入ヲ爲シ又ハ注文ヲ取集ムルニ當リ總テ最惠國待遇ヲ享有スベシ
前記ノ目的ヲ以テ見本及雛形トシテ輸入セラルル物品ハ其ノ再輸出セラルベキコト又ハ法定期間内ニ再輸出セラレザル場合ニ正規ノ關稅ノ納付セラルベキコトヲ確實ナラシムル爲制定セラレタル稅關ノ規則及手續ニ從フニ於テハ兩國

ノ各ニ於テ一時無稅輸入ヲ許可セラルベシ

尤モ右特權ハ物品ニシテ其ノ數量若ハ價格ニ徴シ見本若ハ雛形ト認ムルコト能ハザルモノ又ハ其ノ性質上再輸出ノ際同一物ナルコトヲ認識スルコト能ハザルモノニ及ブコトナカルベシ見本又ハ雛形ガ無稅輸入ヲ許可セラルベキモノナリヤ否ヤヲ決定スル權利ハ何レノ場合ニ於テモ輸入ノ行ハレタル地ノ權限アル稅關官憲ニ專屬ス
兩國政府ハ商工業者及旅商ニ付要求セラルルコトアルベキ身分證明書ノ發給權限ヲ有スル機關竝ニ右證明書ノ雛形ヲ相互ニ通報スベシ

第五條

兩國ノ各ノ國民ハ他方ノ領域内ニ於テ特許、製造標又ハ商標、一切ノ種類ノ工業的意匠及雛形、商號及原產地ノ表示ノ保護竝ニ不正競争ノ防遏ニ關スル一切ノ事項ニ付法定ノ手續及條件ヲ履行スルニ於テハ內國民ト同一ノ權利ヲ享有スベシ

第六條

日本國商船及「フランス」國商船ニシテ印度支那若ハ日本國ノ領水及港ニ入ルモノ又ハ右領水及港ヨリ出ヅルモノハ

1 日仏印經濟協定の成立

其ノ出發地又ハ目的地ノ如何ニ拘ラズ其ノ出入及碇泊ニ當リ名稱ノ如何ニ拘ラズ内國商船ニ課セラレ又ハ課セラルルコトアルベキ所ト異ルカ又ハ之ヨリ高キ税金又ハ手數料ヲ國家、州、市町村又ハ公ノ若ハ權限ヲ與ヘラレタル私ノ機關ノ名義及計算ニ於テ徵收セラルルコトナカルベシ

港、碇泊所及泊渠ニ於ケル船舶ノ繫留、荷積及荷卸、補給竝ニ一般ニ商船、其ノ船員及貨物ニ適用セラルルコトアルベキ一切ノ手續及規定又ハ商船ノ爲スコトアルベキ一切ノ操作ニ關シテハ兩締約國ノ意嚮ハ此ノ關係ニ於テモ亦兩締約國ノ船舶ガ完全ナル均等ノ地步ニ於テ待遇セラルルニ在ルヲ以テ内國船舶ニ對シ許與セラレ又ハ許與セラルルコトアルベキ一切ノ特權及恩典ハ均シク他方ノ國ノ船舶ニ對シ許與セラルルベキコトヲ約ス

第七條

前條ニ規定セラルル船舶ノ旅客及其ノ手荷物ハ右旅客ガ内國船舶ニ依リ旅行スル場合ト同様ニ取扱ハルベシ
右船舶ノ貨物ハ原産地又ハ發送地ノ如何ヲ問ハズ内國船舶ニ依リ運送セラレタルトキト異リ又ハ之ヨリ高キ税金ヲ支拂ヒ又之ト異ル課金ヲ課セラルルコトナカルベシ殊ニ兩國

ノ一方ノ港ニ内國船舶ヲ以テ適法ニ輸入セラレ又ハ輸入セラルルコトアルベキ一切ノ產品ハ他方ノ國ノ船舶ヲ以テモ亦均シク右港ニ輸入スルコトヲ得ベク此ノ場合ニ於テハ名稱ノ如何ニ拘ラズ右產品ノ内國船舶ニ依リ輸入セラルルコトキ課セラルル所ト異ルカ又ハ之ヨリ高キ税金又ハ課金ヲ課セラルルコトナカルベシ右相互均等ノ待遇ハ右產品ガ直接ニ原産地ヨリ來ルト又ハ別國ヨリ來ルトヲ問ハズ適用セラルベシ輸出ニ關シテモ右ト同様ニ全ク均等ノ待遇ヲ爲スベク從テ兩國ノ各ノ領域ヨリ適法ニ輸出セラレ又ハ輸出セラルルコトアルベキ產品ニ付テハ其ノ輸出ガ日本國船舶ニ依ルト又ハ「フランス」國船舶ニ依ルトヲ問ハズ且其ノ仕向地ノ如何ニ拘ラズ之ガ輸出ニ當リ右領域内ニ於テ同一ノ輸出稅ヲ納付シ且同一ノ獎勵金又ハ戻稅ヲ受クベシ

第八條

日本國船舶及「フランス」國船舶ニシテ兩國ノ一方ノ定期郵便運送ノ任務ニ當ルモノハ國家ニ屬スルト又ハ右目的ノ爲國家ヨリ補助金ヲ受クル會社ニ屬スルトヲ問ハズ他方ノ國ノ領水内ニ於テ最惠國ノ同様ノ船舶ニ許與セラルル所ト同一ノ便益、特權及免除ヲ享有スベシ

第九條

難破、坐礁、海上損害又ハ不可抗力ニ因ル寄航ノ場合ニ於テ兩國ノ各他方ノ船舶ニ對シ右船舶ガ國家ニ屬スルト又ハ個人ニ屬スルトヲ問ハズ同様ノ場合ニ内國船舶ニ許與セラルルト同一ノ援助、保護及免除ヲ許與スベシ右船舶又ハ其ノ貨物ヨリ救上セラレタル一切ノモノハ内國ノ消費ニ供セラレザル限り關稅ヲ免除セラレベシ内國ノ消費ニ供セル場合ニハ正規ノ關稅ヲ納付スベキモノトス

第十條

兩國ノ各ノ領事官ハ自國商船内ノ秩序ノ維持ヲ專管スベク又船長、職員及船員間ニ生ズルコトアルベキ一切ノ種類ノ紛議殊ニ雇入契約ノ履行ニ關スル紛議ヲ自ラ處理スベシ地方官憲ハ商船内ニ於テ發生セル騷擾ガ陸上若ハ港内ノ安寧及秩序ヲ害スルガ如キ場合又ハ當該國國民若ハ船員以外ノ者ガ右騷擾ニ關係シ居ル場合ニノミ干與スルコトヲ得ベシ

第十一條

兩國ノ各ノ領事官ハ自國商船ノ脱走船員ノ逮捕及引渡ニ付他方ノ國ノ地方官憲ヨリ該國ノ法令ニ從ヒ援助ヲ受クベシ但シ脱走船員ガ該國ノ國民タル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第十二條

締約國ハ一切ノ關係ニ於テ最惠國待遇ヲ他方ノ國ニ確保スルノ意嚮ナルヲ以テ居住及航海ニ關スル一切ノ事項ニ付兩國ノ一方ガ別國ニ對シテ許與シ又ハ許與スルコトアルベキ一切ノ特權、恩典又ハ免除ヲ即時且無條件ニ他方ノ國ニ及ボスベキコトヲ約ス

第十三條

最惠國待遇ニ關スル本條約ノ規定ハ左ノ事項ニ對シテハ適用ナカルベシ

- 一 國境貿易ヲ便ナラシムル爲接壤國ニ對シ許與セラレ又ハ許與セラルコトアルベキ特殊利益
- 二 關稅同盟ニ基ク特殊利益
- 三 二重課稅ヲ避クル爲第三國ニ對シ許與セラレ又ハ許與セラルコトアルベキ約定ニ依ル利益

第十四條

本條約ノ適用ニ於テハ左ノ如ク解スベキモノトス

一 「兩國」、「兩國ノ各」トハ日本國及印度支那、「兩國ノ一方」、「他方ノ國」トハ日本國又ハ印度支那

二 「國家」トハ「フランス」國ニ關スルトキハ「フラン

ス」國政府又ハ佛領印度支那政廳

三 「國民」トハ印度支那ニ關スルトキハ「フランス」國ノ市民ニシテ印度支那ニ其ノ住所又ハ主タル營業所ヲ有スル者、「フランス」國ノ人民又ハ保護民ニシテ印度支那ニ出生シタル者又ハ印度支那ニ其ノ住所若ハ主タル營業所ヲ有スル者

四 「內國民」トハ印度支那ニ關スルトキハ「フランス」國ノ市民ニシテ印度支那ニ其ノ住所又ハ其ノ主タル營業所ヲ有スル者

五 「日本國商船」トハ日本國ノ國旗ヲ掲ゲ航行スル商船ニシテ日本國ノ法令ニ依リ其ノ國籍ヲ證明スル爲要求セラルル書類ヲ船内ニ有スルモノ

六 「フランス」國商船」トハ「フランス」國ノ國旗ヲ掲ゲ航行スル商船ニシテ印度支那ニ登録セラレ且「フランス」國ノ法令ニ依リ其ノ國籍ヲ證明スル爲要求セラルル書類ヲ船内ニ有スルモノ

第十五條

本條約ノ規定ハ日本國ニ屬シ又ハ其ノ管治スル一切ノ地域及屬地竝ニ佛領印度支那政廳ノ管轄スル一切ノ地域ニ適用

セラルベシ

第十六條

本條約ハ批准セラルベク且其ノ批准書ハ成ルベク速ニ東京ニ於テ交換セラルベシ但シ「フランス」國政府ハ已ムヲ得ザル場合ニハ批准ノ通報書ヲ以テ批准書ニ代フルコトヲ得ベク此ノ場合ニハ「フランス」國政府ハ成ルベク速ニ批准書ヲ日本國政府ニ送付スベシ

本條約ハ批准書交換ノ日ヨリ實施セラルベシ
本條約ハ五年間有效トス

兩締約國ノ何レノ一方モ本條約ヲ終了セシムルノ意思ヲ右五年ノ期間滿了ノ一年前ニ通告セザル場合ニハ本條約ハ兩締約國ノ何レカノ一方ガ之ガ廢棄ノ通告ヲ爲シタル日ヨリ一年ノ期間ノ滿了ニ至ル迄引續キ效力ヲ有スベシ

本條約ハ千九百七年六月十日ノ佛領印度支那ニ關スル宣言書、千九百十一年八月十九日ノ佛領印度支那ニ關スル宣言書及千九百二十七年八月三十日ノ日本國及印度支那間ノ居住及航海ノ制度ヲ定ムル議定書ニ代ルモノトス

右證據トシテ各全權委員ハ本條約ニ署名調印セリ
昭和十六年五月六日即チ千九百四十一年五月六日東京ニ於

テ日本文及「フランス」文ヲ以テ本書ニ通ヲ作成ス

松 岡 洋 右 (印)

松 宮 順 (印)

シャルル、アルセーヌ、アンリー (印)

ル ネ、 ロ バ ン (印)

(付 記)

(不公表)

議定書

佛領印度支那ニ關スル日佛居住航海條約ニ署名スルニ當リ
下記ノ全權委員ハ左ノ諸規定ヲ協定セリ

一 印度支那ニ於テ現ニ實施セラルル外國人身分證明書ニ
對スル手数料ノ率ハ日本國國民ノ爲減額セラルベシ

二 日本國國民ハ現ニ外國人ニ禁止セラルル左ノ職業ヲ印
度支那ニ於テ行フコトヲ認許セラルベシ

船舶代理人但シ代理業ハ日本國船舶ニ關シテノミ行ヒ
得ルモノトス

旅館業

遊戯飲食店業

「ラヂオ」器具及其ノ部分品ノ製造業又ハ販賣業

印度支那ニ居住スル日本國國民ノ需要ノ爲印刷工場一個
所ノ設置及經營ガ認許セラルベシ

日本人醫師二名及日本人產婆二名ニ對シ印度支那ニ於テ
職業ヲ行フコトガ認許セラルベシ但シ專ラ日本人ノミヲ
取扱フベキモノトス

前二項ニ規定セラルル制限ハ右ガ印度支那ニ於ケル日本
人在留民ノ需要ヲ充ス能ハザルコト判明シタル場合ニ於

テハ兩國政府ノ權限アル官憲間ノ合意ニ依リ變更セラル
ルコトヲ得ベシ

三 印度支那ニ設置セラレ又ハ設置セラルベキ日本人企業

ニ依リ使用セラレ得ベキ日本人従業員ノ最高割合ハ商事
企業ニ付テハ全従業員ノ五割、又銀行及其ノ他ノ企業ニ

付テハ「ヨーロッパ」人又ハ準「ヨーロッパ」人ノ従業
員ノ五割ニ引上ゲラルベシ

一ノ企業ガ右規則ニ從フコト能ハザル場合ニハ「フラン
ス」國官憲ハ必要ト認メララルル特例ヲ個別的措置ニ依リ

容認スベシ

殊ニ銀行ハ「フランス」國市民ナキトキハ其ノ日本人從業員數ノ三割迄「フランス」國ノ人民又ハ保護民ヲ使用スルコトヲ認許セラルルコトヲ得ルモノトス

四 「フランス」國政府ハ保護領王ノ同意ヲ留保シテ「アナン」及「トンキン」ニ於ケル不動産所有權取得ノ個別的認許ヲ日本人ニ對シ許與スルコトヲ考慮スベシ

五 經濟的分野ニ於ケル日佛協力ヲ容易ナラシムル爲、農業利權、鑛業利權及水力事業利權ハ印度支那ニ於テ其ノ地ノ法令及規則ニ從ヒ設立セラレ且左ノ條件ニ合致スル會社ニ對シ印度支那ニ於テ正規ノ形式ニ從ヒ許與セラレベシ

イ 右會社ノ資本ハ成ルベク現金ヲ以テ拂込マルベク且日本國國民ト「フランス」國國民トノ間ニ等分セラレベシ「フランス」國國民ニ保留セラレタル資本ニシテ之ニ依リ應募セラレザル部分ハ日本國國民ニ許與セラレルコトヲ得ベシ

ロ 取締役ノ地位ハ原則トシテ實際ニ拂込マレタル資本ノ部分ノ割合ニ應ジ日本國國民ト「フランス」國國民トノ間ニ振當テラルベシ

ハ 高級技術員及其ノ他ノ高級職員ハ原則トシテ日本國國民ト「フランス」國國民トノ間ニ等分セラレベシ

斯ク構成セラレタル會社ニ與ヘラルル利權ノ各ニ付テハ印度支那政廳ニ依リ利權ノ開發條件及許可官憲ニ依ル監督權行使ノ様式ヲ決定スル特別命令書ガ作成セラレベシ

六 専ラ日本國國民ヲ收容シ且日本語ニ依ル教育ヲ施ス日本人學校ノ開設及經營ハ教育ニ關スル規則ニ規定セララル條件ニ從ヒ印度支那ニ於テ認許セラレベシ右學校ニ於テハ「フランス」語ノ補足教育ガ義務的タルベシ

七 日本國印度支那間ノ經濟關係ニ關スル一切ノ問題ヲ檢討スル爲兩國政府ニ依リ指名セララル日本國經濟界及印度支那經濟界ノ民間代表者竝ニ兩國政府ノ代表者ガ定期的ニ會合スル經濟會議ヲ兩國政府ノ後援ノ下ニ創設スベシ

右會議ハ兩國政府ニ對シ提議又ハ勸告ヲ提出スルコトヲ得ベシ

會議ノ事業ノ準備ハ一ハ日本國ニ、一ハ印度支那ニ設置セララル兩事務局ニ委託セラレベシ

八 印度支那ノ沿岸貿易ニ關スル問題竝ニ内水又ハ領海ニ

於ケル航行及漁業ニ關スル問題ヲ友好的ニ解決スル爲居
住航海條約ノ署名後直ニ兩國政府間ニ商議ヲ開始スベシ
航空竝ニ無線電信局及海底電線ニ關スル問題ニ付テハ右
ニ關シ生ズルコトアルベキ具體的ノ個々ノ問題ヲ友好的
ニ解決スル爲兩國政府ハ商議ヲ開始スベキモノトス
兩國政府ハ日本國及「フランス」國ノ船舶ヲシテ兩國間
ノ海運ニ共ニ且協調シテ參加セシメンコトヲ希望スルニ
依リ各國ノ關係海運業者ニ對シ恆常的協力ニ依リ右海
運ニ關スル各種ノ問題ノ解決ヲ確保センコトヲ勸奨スベ
シ殊ニ右海運業者ハ事情ガ許スニ至ラバ直ニ兩國間海運
ノ衡平ナル分配ヲ決定スベシ
本議定書ハ前記條約ト不可分ノ一體ヲ成シ右條約ト同一ノ
有效期間ヲ有スベシ
右證據トシテ下記ノ全權委員ハ本議定書ニ署名調印セリ
昭和十六年五月六日即チ千九百四十一年五月六日東京ニ於
テ日本文及「フランス」文ヲ以テ本書ニ通ヲ作成ス

松 岡 洋 右 (印)
松 宮 順 (印)

シャルル、アルセース、アンリー (印)
ル ネ、ロ バ ン (印)

718 昭和16年5月29日 松岡外務大臣より
在ハノイ林(安)総領事宛(電報)

日仏印經濟關係諸協定の実施に伴う関稅措置
につき訓令

本省 5月29日後9時發

第一三二號(極秘)

往電合第一〇二〇號ニ關シ

協定成立ト同時ニ兩國間ノ貿易ヲ直チニ實行スル爲五月六
日附祕密交換公文ニ依リ相互ニ一方面的措置トシテ(イ)關稅ニ
付テハ最惠國待遇ヲ與フルコト(ロ)貿易品目表所定ノ輸出入
許可ヲ發給スルコト及(ハ)協定所定ノ支拂方法ヲ實行スルコ
トヲ定メタルカ右ノ内關稅ニ付テハ佛印側委員ト打合ノ結
果右措置ヲ執リタル場合文書ヲ以テ通報スルコトトナリ居
ルニ付貴官ヨリ佛印側ニ對シ我方ハ五月六日附公文ニ從ヒ
五月二十六日以降佛印產品ニ關シ最惠國待遇ヲ與フ
ルニ必要ナル措置ヲ執リタル旨文書ヲ以テ通告セラレタシ

1 日仏印經濟協定の成立

右ト同時ニ佛印側ニテモ速ニ我產品ニ對シ最低稅率ヲ適用スルコト及我方ハ前記ハニ關シ既ニ正金銀行ニ對シ必要ナル指令ヲ與ヘタルニ付先方ニ於テモ佛印銀行ニ對シ至急指令ヲ與ヘ正金銀行ト協議シ前記ハノ實行ヲ開始セシムル様申入相成度
西貢ニ轉電アリタシ

719 昭和16年5月31日 松岡外務大臣より
在仏国加藤大使宛(電報)

仏印における援蔣物資の処分措置方訓令

付記 作成局課、作成日不明

「佛印ニ於ケル援蔣物資滯貨處分ニ對スル米
國抗議ニ關スル件」

本省 5月31日後4時50分發

第二〇九號(至急)

佛印ニ於ケル援蔣物資ノ處分ニ關シテハ現地ニ於ケル調査ノ進捗日佛印經濟交渉等諸般ノ情勢ヲ考慮シ爾來之カ實施ヲ差控ヘ居リタルモノ應準備完了セルヲ以テ最近陸、海、外協議ノ結果大略左ノ要旨ニ依リ實施スルコトニ決定セリ

一、佛印當局ニ對シ我軍ニ於テ一應搬出スヘキ旨通告シソノ回答ノ諾否ニ拘ラス佛側ノ遷延策ニ乘セラレサル爲緊急已ムヲ得サル措置トシテ之カ搬出ヲ實施ス

二、昭和十五年六月十九日以降ノ蔣側物資ノ轉籍ハ一切認メス且ツ右以前ニ於テモ我方ニ於テ正當ノ實證ヲ確認セサルモノハ其ノ所有權ヲ承認セサルモノトス

三、「ノース、アメリカン、シンヂケート」及西南運輸公司(「フアー、イースタン」會社)ハ假裝轉籍ナルカ故ニ其ノ存在及主張ヲ認メス

四、滯貨物資ノ購入ハ先方ノ偽裝轉籍ヲ誘致スル虞アルニ鑑ミ當分ニ之ヲ行ハス

五、個人所有物資中所要ノモノヲ購入スル場合ハ陸、海中央ノ指定監督スル單一ノ組合的機關ヲ以テ之ニ當ラシム

仍而現地軍當局ハ二十三日佛印當局ニ對シ搬出方通告スルト共ニ二十五日ヨリ之カ實施ヲ強行セルカ(往電合第一一五二號)東京ニ於テモ二十六日佛大使ニ對シ之ヲ通告セリ(郵送便參照)

尚今回「沒收」ノ字句ヲ避ケ「搬出」トセルハ敵産ト雖モ第三國領域タル佛印ニ於テ沒收スル時ハ佛印ヲ對象トシテ

沒收措置ニ出ツルカ如ク解セララルル虞ナキニシモ非サルヲ以テ兎ニ角我方權域内ニ搬出シ然ル後蔣政府ヲ對象トシ沒收措置ニ出テントスルノ趣旨ニ依ルモノニシテ佛側ニ對シテハ本來敵産ハ沒收シ得ルハ當然ナルモ偶々其ノ所在カ佛印内ナル爲普通ノ狀況下ニ在リテハ右權利ヲ行使シ得サルモ佛印北部地方ハ對支作戰ノ基地トシテ我軍ノ進駐ヲ認めラレタル特殊地帯ナルニ鑑ミ我方ノ入手セル敵産ハ之カ蔣側ニ移送セララルルヲ防止スルト共ニ之カ散逸ヲ防ク爲我方ニ安全ト認めタル適當ノ地點ニ移送保管セントスルハ當然ニシテ右我方措置ニ對シテハ客年八月三十日協定ノ精神ニ基キ佛側ノ協力ヲ期待スルノ建前ニテ應酬セントスルモノナリ

尙本件物資中ニハ米國關係ノモノ多量アリト認めラレ米ヨリ抗議アルハ當然ト豫想セララルル處從來モ蔣政權ニ屬ストノ我方認定ニ不服アルモノハ其ノ所有權ニ付舉證ノ責任アル旨屢次米側ニ申入置キタルモ應シ來ラス今次ノ搬出措置ニ於テモ米側ノ反證ニシテ正當ト認ムル場合ハ何等補償ノ用意アリ

米ニ轉電セリ

(付記)

佛印ニ於ケル援蔣物資滯貨處分ニ對スル

米國抗議ニ關スル件

(本件ハ派生的問題ナルヲ以テ敢テ白書ニ記載スルノ要ナキモノト認ムルモ御參考迄概略記述セリ。)

(一)佛側ノ佛印經由援蔣物資輸送禁絶方確約ニ基キ帝國ヨリ監視團派遣セラレタルガ當時佛印ニ滯貨セラレ居リタル支那向物資ニ對シテハ我方監視團ハ無益ノ紛争ヲ避クルト共ニ出來得ル限り地場消費ニ充ツル方針ノ下之ガ移動ヲ禁止セルモ米側ヨリ其ノ所有ノ確證ヲ舉ゲテ佛印當局ニ再輸出ヲ願出アリタルモノニ對シテハ佛印側ヲシテ逐次之ヲ許可セシメタリ。

(二)然ルニ昭和十五年十一月五日在京米國大使館ヨリ我外務省ニ對シ書キ物ヲ以テ米國商社所有ノ商品ガ主トシテ日本側ノ佛印當局ニ對スル壓迫ノ結果佛印當局ニ依リ佛印ヨリノ再輸出ヲ拒絕セラレ居ル趣ナルガ右不法ナル干涉ノ停止方ヲ要求スル旨申越シ

1 日仏印經濟協定の成立

(三)更二十二月十七日在京米大使ヨリ松岡外務大臣宛公文ヲ以テ前記ト同様ノ趣旨ヲ以テ抗議ヲ爲シ來リ

(四)其後更二十二月三十日米大使館口上書ヲ以テ佛印ニ於ケル支那向赤十字用品ノ移動ニ對スル日本側ノ干渉ノ正當ナルザル旨抗議越セリ

(五)以上ノ抗議ニ對シテハ我方ハ昭和十六年一月七日在京米大使宛公文ヲ以テ我方措置ノ何等不當ナラザル事即チ我方ニ於テハ米側所有權ノ確認セラレタルモノニ對シテハ佛印當局ガ輸出許可ヲスルニ付キ何等干渉シ居ラズ又之等商品中ニハ偶々所有權分明ナラザルモノ多數アリ故ニ米國商社ニ於テ輸出セントスルニ當ツテハ其ノ商品ノ所有權ノ米側ニアル事ヲ舉證スルノ必要アル事ノ趣旨ヲ以テ回答シヤレリ

(六)右ニ對シ一月二十四日在京米大使ヨリ松岡大臣宛公文ヲ以テ米國商社ガ商品ノ輸出ニ際シ其ノ所有權ノ米側ニアルトニ付舉證ナスベキコトヲ要求スルノ權利ヲ容認スル能ハズト申越シ

(七)依ツテ我方ハ二月八日在京米大使宛公文ヲ以テ我方ニ於テハ一切ノ商品ニ對シ無差別ニ差押ヲ爲シ居ルモノニ非

ズ其ノ所有權ノ明カニ蔣政府側ニ屬スルモノニ付テノミ佛印當局トノ了解ノ下ニ敵産トシテ差押ヲ爲シ居ルモノニシテ其ノ所有權ノ所在ニ付之ヲ主張セントセバ當事者ニ於テ之ヲ舉證スベキハ當然ニシテ若シ舉證無キ場合ハ我方單獨ノ檢討ニ依ル認定ニ委セラレタルモノト看做スノ外ナク從ツテ本件日本軍ノ措置ハ當然且正當ナルベキコトヲ回答セリ

(八)次イデ二月十三日在京米大使ヨリ公文ヲ以テ日本軍官憲ガ米國商品ノ再輸出許可ニ付キ引續キ佛印當局ニ干渉シ居リ右不法措置ノ停止方ヲ強要スル旨申越シ

(九)其ノ後五月二十五日現地ニ於テ敵産滯貨ノ佛印外搬出實施セラレルト成リタルガ六月四日在京米大使ハ松岡大臣ヲ來訪公文ヲ以テ又二十一日口上書ヲ以テ本件商品ノ大部分ガ米國産ニシテ米國民所有ナルニ依リ且米國政府ガ右ニ對シ多額ノ「クレヂット」ヲ附與シ居ルニ鑑ミ速ニ正當ナル所有者ニ返還セラルベキ旨要求スルト共ニ今次日本軍ノ措置ニ關シ何等其ノ權利ヲ容認スル能ハズ正當ナル所有者ノ希望スル場所ニ引渡ヲ爲スベキ旨要求越セリ

(十)右ニ對シ我方ヨリ米大使ニ對シ同月二十四日附文書ヲ以テ本件滯貨ニシテ蔣政府側ニ仕向ケラレタルモノハ其ノ原產地ノ如何、「クレヂット」等代金支拂ノ有無ニ拘ラズ敵産ト認メラルルコト當然ニシテ我方ニ於テ之ヲ處分シ得ル次第ナルモ無用ニ第三國ノ權益ヲ犯サザランコトヲ慮リ前記認定ニ對スル反證ノ有無ニ付キ從來慎重調査ヲ重ネ來レルモノニシテ曩ニ米側ニ於テ本件舉證ノ責任ヲ回避セラレタルヲ遺憾トシ此ノ間重慶側ニ於テ貨物ノ密送ヲ企テタル事例一再ニ止ラズ此ノ儘ニテハ滯貨ノ安全確保ヲ期シ難キヲ以テ敵産タルノ確證アルモノ及敵産ト認定セラレ右ヲ覆スベキ反證無キモノハ一應之ヲ他ノ安全ナル場所ニ搬出移送スルノ餘儀ナキニ到リタルガ唯我方ニテハ右搬出後ト雖モ右貨物中第三國側ノ所有權ニ屬スコト反證セラレタルモノニ付テハ之ヲ救済スルノ用意アルベキ旨回答シヤレリ。

(十一)右我方ノ主張ニ對シ米側ヨリ其後何等意思表示ナク所定ノ搬出作業ハ支障ナク行ハレタリ。

尙本件ニ關シテハ佛印現地ニ於テ米國領事ヨリ在河內林總領事ニ對シ五月二十四日、六月十一日、六月二十六

日、七月七日、夫々抗議ノ次第アリ右ハ當時我方監視委員長タル澄田少將ニ移牒セラレ同機關ニ於テ處分セラレタリ。

720 昭和16年6月27日 閣議決定

「佛印經濟調查計畫要綱」

佛印經濟調查計畫要綱

一、方針

今次成立ノ日佛印經濟協定ニ關聯シ佛印ニ於ケル邦人企業ニ關シテハ政府統制ノ下ニ之ヲ進出セシメ以テ企業ノ強化擴充ヲ圖ルヲ要スルニ鑑ミ之ト密接不可分ノ關係ニ在ル經濟調査ニ關シテハ政府指導ノ下ニ官民一體トナリ組織的ニ之ヲ實施シ以テ皇國ノ當面ニ於テ必要トスル重要物資ノ急速確保ヲ圖ルト共ニ皇國ノ經濟發展ニ必要ナル資料ヲ獲得セントス

二、實施要領

(一)一般の且系統的經濟調査ニ關シテハ河內及西貢帝國總領事館ニ設置セラルヘキ常駐經濟調査機關ヲシテ之ヲ

1 日仏印經濟協定の成立

實施セシム

(二) 差當リ急速ニ企業化ヲ目標トシテ關係官廳ノ官吏竝ニ民間ノ技術家及企業家ヲ以テ構成スル資源調査團ヲ佛印ニ派遣ス(別紙參照)

(三) 學術的資源調査ノ爲調査團ヲ派遣ス

本調査團ハ主トシテ學者ヲ以テ編成シ前項ノ調査團ト別箇ニ派遣スルモノトシ其詳細ハ別ニ之ヲ定ム

(四) 常駐經濟調査機關設置及調査團派遣ニ要スル費用ニ付テハ必要ニ應シ豫算的措置ヲ講スルモノトス

別紙

佛印資源調査團派遣計畫

一、本調査團ノ目的ハ急速企業化ヲ目標トシタル調査ヲ實施シ資源開發暫定計畫ノ立案ニ資セントス

二、本調査團ノ編成ハ第五委員會ニ於テ之ヲ行フモノトス

三、調査團ハ主トシテ關係官廳ノ官吏竝ニ民間ノ技術家及企業家ヲ以テ構成シ調査團長ハ對外折衝ニ經驗ヲ有シ且佛印事情ニ精通スル適任者ヲ以テ充ツルコトトス
調査團長ハ調査團ヲ統轄シ調査各班ノ連絡調整ヲ計リ且

調査團ノ活動ニ附帶シテ生スル重要事項ニ付佛印政廳トノ交渉ニ當ルモノトス現ニ佛印ニ在住スル關係官廳官吏、技術家、企業家ヲ調査團員ニ加フルコトヲ妨ゲズ

四、調査團ハ概ネ左ノ要領ニヨリ必要ナル人員ヲ以テ之ヲ組織ス

(一) 總務班ハ調査團長及其ノ直屬ノ隨員ヲ以テ組織シ各班ノ總括、連絡調整ヲ行ヒ且各班ニ關スル一般的事項ヲ調査スルモノトス

(二) 農林關係調査ハ農業一般、米、玉蜀黍、護謨、棉花、黃麻、林業、畜産等ニ付キテ行ヒ之ヲ數班ニ分ツモノトス

(三) 水産關係調査ハ水産班ヲ以テ行フモノトス

(四) 鹽業關係調査ハ鹽業班ヲ以テ行フモノトス

(五) 鑛業關係調査ハ鑛業一般、鑛産資源概査、非鐵金屬(錫、亞鉛、銅、ニッケル、コバルト)、鐵、タンクス、テン、マンガ、無煙炭等ノ精査ニ付キテ行ヒ之ヲ數班ニ分ツモノトス

(六) 水力電氣調査ハ電力班ヲ以テ行フモノトス
右各班ノ派遣ハ重點主義ニ依リ之ヲ實施ス

右各班ハ班毎ニ主任ヲ定メ之ヲ中心トシテ具體的調査計
畫ヲ立ツルモノトス尙班毎ニ助手一名通譯者一名案内人
一名程度ノ隨員ヲ附ス

右調査計畫ハ調査團長ノ承認ヲ經ルヲ要ス

各班ノ數及構成ハ調査計畫ニ從ヒ適宜増減スルコトアル
ベシ

五、調査團本部(總務班)ハ河内總領事館内ニ置ク

六、調査ノ結果ハ各班ニ於テ取纏メ調査團長ヨリ之ヲ政府ニ
報告ス

調査ノ結果ハ一切之ヲ私スルヲ許サス其企業化ニ付テハ
政府之ヲ別途決定ス

七、調査期間ハ原則トシテ各班約三ヶ月(鑛業關係諸班ハ約
六ヶ月)トシ出發ノ時期ハ班毎ニ調査團長ト協議ノ上之
ヲ決定ス尙調査團長及總務班員ハ調査終了後一定期間佛
印ニ駐在スルコトアルヘシ

備考

(一)本調査團ノ派遣ハ佛印側ト打合ノ上之ヲ實施スルモ
ノトス實施ニ當リテハ不必要ニ佛印側ヲ刺戟スルカ
如キコトナキ様措置スルモノトス

(二)現在佛印ニハ外交機關、澄田機關及作戰部隊アリテ

夫々必要ナル經濟事務ヲ實施シ居ル處本調査團進出
ノ上ハ其ノ目的完遂ノ爲右諸機關トノ調整ヲ圖ル爲
適當ナル措置ヲ講スルモノトス

721

昭和16年7月1日
在ハノイ林總領事より
松岡外務大臣宛(電報)

事前協議のない調査團の派遣は認められない
との仏印總督府回答について

ハノイ 7月1日後発
本省 7月1日夜着

第二三五號

往電第二一七號ニ關シ

總督二十八日附回答左ノ通り

日佛提携ニ依ル佛印ノ經濟開發ハ今回ノ協定ノ文字及精神
ニ依レハ議定書規定ノ定期會議ノ結果ニ俟ツヘキモノニシ
テ豫メ總督府ニ相談ナク調査團ヲ派遣スルハ右精神ニ反ス
依テ本件ヲ本國政府及在本邦大使ニ移牒セリ 以上

書面空送ス

1 日仏印經濟協定の成立

722

昭和16年8月8日

在仏国加藤大使より
豊田外務大臣宛(電報)

仏印への資源調査団派遣に關する仏国当局との協議について

ヴィシー 8月8日後発

本省 8月9日前着

第四五三號

貴電第三三九號ニ關シ(佛印資源調査團派遣方ノ件)

「アルナール」歸任シタルヲ以テ八日原田ヲシテ御訓令ノ趣旨ヲ申入レシメタル處「ア」ハ本件ニ關シテハ未タ「ア
ンリー」大使ヨリ報告ニ接セサルモ能ク了解セリトシ唯調
査團カスル多人數ニ上ルトハ實ハ豫期セサリシコトニモア
リ「プラトン」植民大臣トモ協議ノ上御回答致スヘシト答
ヘタルニ依リ原田ヨリ今次調査團ノ派遣ニ關シ我方ノ期待
スル所ハ右ニ對スル佛印官憲ノ全的協力ニアルヲ以テ現地
官憲ニ對シ至急必要ナル訓令ヲ發出セラレタク尙如何ニモ
人數多キカ如キモ右ハ各班力順ヲ追ヒテ派遣セラルルモノ
ナレハ佛側ニ於テ何等不便ナカルヘキ旨說示シ置キタル趣
ナリ

723

昭和16年8月12日

在仏国加藤大使より
豊田外務大臣宛(電報)

仏印への資源調査団派遣を仏国承諾について

ヴィシー 8月12日後発

本省 8月13日前着

第四五八號(至急)

貴電第三四九號ニ關シ(佛印資源調査團派遣ニ付督促ノ件)

十二日原田「アルナール」往訪督促シタル處「ア」ハ佛國
政府ハ本件我方提案ニ同意シ佛印總督ニ對シ必要ナル訓令
ヲ發スルコトニ決シタル旨回答シ唯一時ニ多人數ノ調査員
カ押掛ケラルル時ハ徒ニ混雜ヲ來タス恐レアルヲ以テ此ノ
點タケハ御留意アリタシト附言セリ右ニ對シ原田ヨリ其ノ
心配ナキコトヲ指摘シタル後先ニ佛側ニ於テ種々條件ヲ附
シタルモ最早其ノ必要ナキニ至リタルモノト思考スト述ヘ
要ハ今次調査ニ關シ佛印官憲カ専心協力スルコトニアルヲ
以テ調査團到着ノ上極力之ト協調シ無事其ノ使命ヲ完遂セ
シムル様現地官憲ニ對シ訓令方依頼シ置キタル趣ナリ

昭和16年10月23日

内山仏領印度支那派遣公使より
東郷外務大臣宛(電報)

資源調査団への協力を仏印総督府了承について

ハノイ 10月23日後発

本省 10月24日前着

資源第八號

(1) 日本使内田同伴佛印政廳訪問先ツ直接ノ話相手タル
經濟局長「マルタン」ニ面會シ調査團ノ使命等ヲ説明シ佛
印當局ノ協力ヲ求メ特ニ今回到着セル各調査班ニ付一々例
ヲ擧ケテ具體的ニ便宜供與協力ヲ求メタル處「マ」ハ經濟
協定ノ實施ニ關シテハ既ニ政廳ニ於テ經濟局第八課ヲシテ
其ノ折衝ニ當ラシムルコトトナリ居レルニ付同課ト日本側
事務當局ト聯絡ヲ密ニシ日本側各班ヲ其ノ希望スル關係部
局ニ照會シ必要トスル書類資料ヲモ蒐集提供セシムヘシト
述ヘ其ノ態度相當誠意アルモノト認メラレタリ右「マ」ヨ
リ日本側ノ企業進出ニ關シテ日本側ニ於テハ貿易ニ付
十社⁽²⁾ヲ設ケタル如キ統制ヲ企業方面ニ於テモ採用スルモノ
ト了解シ差支ヘナキヤト質シタルヲ以テ本使ハ其ノ通りナ
リ群小企業家ノ不統制ナル進出ヲ制シ政府ニ於テ完全ニ統

制スル方針ナリト答ヘ置キタリ

次テ約ニ依リ「ドクー」總督ニ面會シタル處總督ハ懇勸ニ
迎ヘ調査團ノ任務遂行ニ對シ何ナリトモ便宜供與スヘキ旨
ヲ述ヘ極メテ好意的態度ヲ示シタルカ次ニ面會セル總務長
官「ゴウチエ」モ亦同様好感ヲ以テ迎ヘ特ニ石油ノ採掘ニ
關シ先年「チエボン」地方ノトツ田ヲ一八〇米開掘セルモ
資材不足ノ爲中絶シ物ニナラサリシ旨ヲ語り今日ハ日本側
ヨリ資材ノ供給ヲ得テ物ニシタキモノナリト述ヘタリ
以上會見ハ未タ瀨踏ニ過キス實際上如何ナル程度迄便宜供
與スヘキヤ遽ニハ樂觀ヲ許ササルモ不取敢

725

昭和16年10月29日

横山(正幸)仏印資源調査団長より
東郷外務大臣宛(電報)

資源調査に関し仏印当局と意見交換について

ハノイ 10月29日後発

本省 10月29日夜着

資源第一四號

往電第八號ニ關シ

二十五日約ニ依リ總務委員及各班長帶同經濟局長「マルタ

ン」往訪經濟局米領事課長「テオリエ」竝ニ關係係官タル
農林畜産監督局長「カルトン」、鑛工監督局長「ゲイヤ
ン」、鑛山課長「デルソー」、地質課長「フロマジエ」ト
會見シ彼我係員間ノ事務連絡ノ端緒ヲ開キタルカ次テ二十
七日ヨリ各班毎ニ佛印側前記係官ト具體的折衝ニ入り佛印
側モ我方ノ資料提供其他ノ要求ニ熱意ヲ以テ迎ヘ石油ノ如
キニ付テハ地質課長自ラ同行スルコトトナリ事業ハ漸次軌
道ニ乗り出シタリ